いのちへの思いを育てる道徳遠隔授業
―テレビ付き携帯電話で死を話合う小学校中学年の授業―

上薗恒太郎、藤木卓、・瀬浩三、増田祥子、寺嶋浩介、森田裕介、森永謙二

離れた地との遠隔形式による視野の広がりを背景に、死を現実的に認識するようになる小学校中学年について、タンポポはいつか死ぬと思いますか、自分はいつか死ぬと思いますかと問いかけ、いのちが１つであるばかりでなく、つながっていくいのちだと生死の判断の根拠を集約して、子どもが思いを語り合いながら進める道徳授業の意義と指導案を示した。

I　道徳遠隔授業の概要

実施日：2006年2月28日（火）10時15分から１２時

実施校：長崎県五島市立川原小学校４年生（１１名）
　　　　福岡県うきは市立妹川小学校３・４年生（１７名）

後　援：五島市教育委員会
　　　　うきは市教育委員会

スタッフ：心の教育総合支援センター　上薗恒太郎（代表）、
　　　　藤木卓、森田裕介、寺嶋浩介（技術・授業支援）
　　　　五島市立川原小学校、増田祥子（授業・グループエンカウンター担当）
　　　　うきは市立妹川小学校　・瀬浩三、森永謙二（授業担当）

場　所：五島市立川原小学校：長崎県五島市岐宿町川原2370番地、電話（0959-82-0112）
　　　　当日の授業場所：川原小学校４年生は福江島開発総合センター会議室
　　　　（長崎県五島市岐宿町岐宿2535、電話：0959-82-1111(代表))
　　　　うきは市立妹川小学校３・４年生は妹川小学校教室
　　　　（福岡県うきは市浮羽町妹川2285-2、TEL：0943-77-2452）

時　間：
　３・４校時　(10:15～12:00)
　10:15～10:35　グループ・エンカウンター
　10:35～10:45　休み時間
　10:45～11:45　道徳授業および授業評価
　　　～12:00　終了

背景：

いのちの大切さを伝える道徳授業への要請は、相次ぐ子どもの自死や事件を背景に増大している。道徳授業が必要であるとの論とともに、事件の内容から、今どきの子どもたち

の死の意識を疑問視する論調があった。こうした事情が、この道徳授業の背景にある。

ここからややもすると出てくるのは、いのちを大切にしよう訴える道徳授業であり、子どもに正しい死の意識を持たせようとする考えである。ところが、上薗の調査（「子どもの死の意識といのちの教育」教育学研究台 64 巻第 1 号、1997、21 頁）によれば、子どもたちはいのちが大切であるとはすでに知っており、何が死ぬものであるかの「常識」は 20 代においても必ずしも確立しているわけではない（「子どもの死の意識」、長崎大学心の教育総合支援センター『こころ育て　特集：子どもと死を考える』、教育出版、2005 年 10 月、特に 13 頁）。年齢段階の進行過程において小学校中学年は，死の意識を確立していく年頃であるところから、死についての考えを扱う道徳授業を進めることは重要である。死の意識においても、年齢段階に応じた授業を構想する必要があろう。

2006 年度に配布される文部科学省小学校の『心のノート』（心のノート　小学校 3･4 年平成 18 年度補訂版）において、中学年においては「たったひとつのわたしのいのち　だからかがやいて生きる」のページが増やされるなど、今日の課題に応えようと工夫されている。本授業では、改訂される中学年の当該ページを展開の終末に組み込んだ。

長崎大学心の教育総合支援センターは、地域教育支援を掲げて 2005 年に設立され、各種の講座、相談、遠隔事業、調査、機関誌発行などを行ってきたが、道徳授業という心の教育もまた重要な支援の場である。

主旨：

この道徳遠隔授業には以下の３つの特色がある。

１つには、子どもの死の感じ方に耳を傾ける授業である。

２つには、島嶼部の教育、複式学級の教育を提言する授業である。

３つには、多様な感覚と考えを遠隔形式によって活かす授業である。

４つには、個別に子どもを支援し、個の道具であるテレビ携帯を使った授業である。

そのために、死を扱う道徳授業を実施し、五島市川原小学校の１１人の４年生と、うきは市妹川小学校の１７人の複式学級３・４年生が出会う、多様性の場を、一体化した１つのバーチャルな教室として実現しようとした。

機器構成

1　授業者スクリーン（teachers screen）によって授業者が画面上に登場するほか、授業用素材を提示する画面として用いる。そのほかに第 2 のスクリーンとして、友だちスクリーン（friends screen）を教室横方向に設置し、２教室の一体化を図る。振り向けば隣に友だちがいるという環境をつくる。本授業において基本的に授業者スクリーンは、子どもたちの前面に相手方教員と当該教室にいる教員とが並んで TT として授業に当たる構成である。また友だちスクリーンは基本的に、相手方の児童を常時映し出しておく。しかし友だちスクリーンは、必要な場合第 2 の授業用素材の提示画面としても使う。すなわち必要ならば 2 つのスクリーンでいわゆる教材を提示できる。

スクリーンの配置は、全体で 1 つの教室となるように構成にする。すなわち相手側教室は、スクリーンを図と左右逆配置にする。

2　テレビ付き携帯電話を使って、子どもたち相互の話し合いを図る。携帯電話の音声は４人ほどで聞けるようにイヤホンをつないだ。2つの教室の子どもたちを合計4つのグループに分け、離れたグループ間をつなぐ個人の道具としてテレビ付き携帯電話を配置した。これによって子どもたちは、教室一斉の話ではなく、比較的個人的な形で互いに話すことができる。また、これによってひとり一人の授業参加の機会が飛躍的に向上する。テレビ付き携帯電話は、子どもたちの発言の機会を格段に増やすと思われる。

3　マイクは、携帯電話のマイクを除くと、授業者用マイク、子どもたちの発言用マイク、集オンマイクの 3 つを使用した。集音マイクは、全体の雰囲気や不規則発言を伝えて、2つの教室の一体化に役立つ。

4　2つの教室を ADSL で結んだ。この手段に選択の余地はなかった。通信状態を選ぶことのできない当初部のまた山間部の学校で唯一の手段であった。

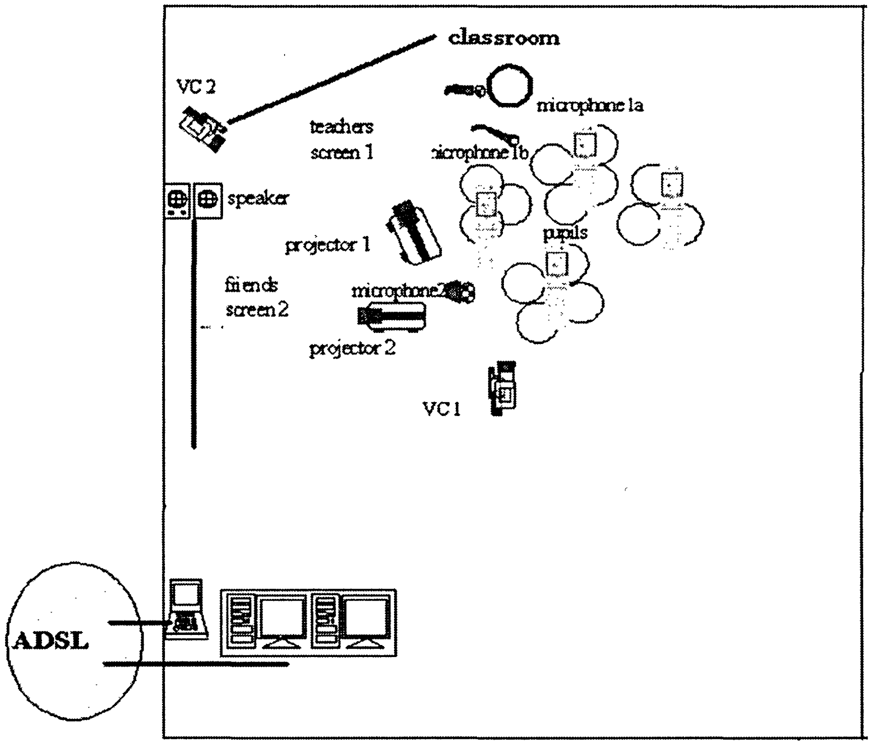


図１　五島側の教室の機器配置図

詳細に述べると、この道徳遠隔授業には、以下の注目すべき点がある。

1　（死の意識）

子どもの死の感じ方による道徳授業を、遠隔授業として計画した。

本道徳授業は、子どもたちに耳を傾けるところから出発しようという試みである。現実の子どもに接するとき、子どもに聞こう、子どもの死に対する感覚から出発しようという姿勢が基本にある。子どもが死にどのような思いを寄せているのか、彼らの語りに耳を傾けようとする。

小学校中学年は、学習指導要領によると「この段階になると、現実性をもって死を理

解できるといわれる。特にこの時期に、生命の尊さを感得できるように指導する必要がある」。死の意識形成期にあたる小学校３・４年生を対象に、どのような死を扱う道徳授業が可能か取り上げる。

2　（他者を鏡とする遠隔）

遠隔授業は、日頃の世界を超えて、感覚や考えを交換するよさがある。日頃にない感じ方、考え方に接して、新しい認知様式を知り、あるいは日頃の考え方を未知の他者によって確証することができれば、そこに学びの飛躍が生じることになる。道徳遠隔授業は、学びを拡大する機会を提供する。

他者との交流、他者による自己確認が、道徳性発達の基本にあり、道徳遠隔授業はその機会となりうる。

3　（個の支援：小規模学級・複式学級）

小規模学級は、子どもの数の減少と共に増加し、また少人数教育への要請と共に、増加していくであろう。ところが、有人離島数が全国1である長崎県では、少人数学級での感じ方・考え方の多様性の少なさを課題にしている。幼少時から共に育ってきた中間は、おおよそ誰がどのような感性と意見を持っているか知っている。だから全部を語らなくても、相手のいいたいことがわかる仲よさがある。これはしかし、他者への自己表現や感覚と意見の多様性を必要とする場合には、乗り越えるべき課題となる。

また、少人数の一つの成り行きである複式学級において、どのような道徳授業が有効なのかを探っていく必要がある。これまでの学校教育の前提であった学年による等質性の確保が道徳授業において必ずしも必須の要件ととらえる必要はないだろう。学年の違いは、必ずしもネガティブな要素ではなく、多様性の一つであろう。この授業では、2学年を包摂する授業として提案する。

この道徳遠隔授業では、授業全体の1時間での目標達成を目指すとともに、ひとり一人の課題に即した達成目標を見定めて、授業での支援をおこなう。地域の特性や学年の差異やある支援を必要とするかどうかも、子どもにしてみれば、一定のカテゴリを当てはめられることではなく、個の在り方の違いであるから。

4　（授業者の力量向上）

複数の教師と関係者によって進める授業であり、1つの授業をつくりあげる相互の努力は受け身の研修以上の力量向上に役立つ。この道徳遠隔授業は、今後の教育改善に必要な、TT による授業のノーハウ、遠隔授業の進め方、道徳授業構成の研修など、教員にとってすぐれた機会である。道徳遠隔授業の、また特別支援をふくむ道徳授業のための、複式学級用の授業用素材、方法開発の意義がある。

5　（調査研究との連携）

五島市においては現在、心の教育総合支援センターによって、子どもの死の意識調査、連想調査、健康とライフスタイルの調査を進めており、こうした調査と連携して進める授業である。特に、授業中に子どもたちが話し合うテーマは、死の意識調査の項目に入っており、単一自由連想調査においても刺激語〈死〉は刺激語として取り込まれていた。これらの結果を背景にした授業分析が可能である。

この道徳遠隔授業においては、連想調査を始めいくつかの授業評価をおこない、授業の成果として子どもたちの中に何が起こったかを明らかにしていく。

6　（テレビ携帯電話の有用性）

これまで，遠隔共同学習におけるコミュニケーションはクラス対クラスが多く，個々の子ども同士のコミュニケーションが深めにくい状況にあった。メールや掲示板というインターネット上のメディアにはそれを打破する可能性があるが，文字上での表現となるため，小学生の子どもにとっては情報を的確に伝えるために努力を要する。また，映像で可能なインパクトのある表現ができず，ノンバーバルなコミュニケーションが失われる。そこで，テレビ携帯電話というメディアを利用すれば，パーソナルなメディアとして数名でのグループ間での交流や個人間での交流が可能になり，映像と音声を組み合わせた表現もできる。電話は、子どもたちが慣れ親しんでいるメディアでもある。

さらに，携帯電話であれば電波の受発信によってネットワーク接続がなされるため，遠隔共同学習の環境を構築するための特別の回線を敷設することに伴う負担を考える必要がない利点がある。

7　（情報技術上の意義）

遠隔授業は，物理的な距離の隔たりを越えて遠隔地とのリアルタイムによるコミュニケーションを実現するディジタル動画を活用する絶好の機会である。また、低年齢を対象とする遠隔授業ほど動画品質の確保が重要であるため、先進的情報技術が試される機会とも言える。さらに本遠隔授業は「テレビ携帯」を用いた遠隔地間でのグループ活動を取り入れた先進的な授業であり、児童の活動場面の活性化とコミュニケーション量の拡大が期待できる。

II　道徳遠隔授業計画

道徳遠隔授業指導案

いのちへの思いを育てる道徳遠隔授業
――テレビ付き携帯電話で死を話し合う小学校中学年の授業――

1　主題名　　死と生について考える
（中　3－（2）　生命の尊さを感じ取る）

本授業は、長崎県五島市立川原小学校の4年生11名と福岡県うきは市立妹川小学校の3･4年17名（複式学級）の2地点をインターネットによる遠隔教育システム（テレビ会議システム）およびテレビ付き携帯電話で結び、一つの道徳授業として構成する。

2　主題観

（1）地域および児童の実態

＜位置＞

長崎県五島市は、九州の最西端に位置し、長崎港の西方海上約100kmの五島列島の南西部、福江島、奈留島、久賀島、椛島、黄島、赤島、蕨小島、黒島、島山島、嵯峨島及び前島の 11 の有人島と 52 の無人島により構成されている。五島市の総面積は、420.29km2になり、福江島の西側の海岸には、東シナ海の荒波を受けて、みごとな海蝕崖がつらなり、特に大瀬崎の断崖、嵯峨島の火山海蝕崖は有名である。また、福江島、

嵯峨島には、小型のホマーテ（臼状火山）及びアスピーテ（楯状火山）の火山群があり、その特異な火山形はわが国でも珍しい存在となっている。このため、景観は非常に美しく、その大部分が西海国立公園に指定されている。気候は対馬暖流の影響を受けて温暖であるが、台風の常襲地帯でもあり、年間降雨量が多くなっている。

一方、福岡県うきは市は、平成 17 年 3 月に旧浮羽町と旧吉井町が合併して誕生した新市である。うきは市は、福岡県の南東部に位置し、東や南は大分県日田市と接している。地形的には南に耳納連山を抱き、北に「筑紫次郎」と称される筑後川が流れている自然に恵まれた地域である。また、うきは市は、筑後川の南に広がる平坦部、平坦部と山間部の間にある山麓部、耳納連山に属する山間部に区分され、平坦部には肥沃な水田地帯が広がり、山麓部には果樹地帯が形成され、山間部は棚田などを含む森林となっている。

＜五島市立川原小学校の児童の実態＞

川原小学校区は、五島市の福江島の北部、岐宿町にあり、北側に海岸部、南側に山間部をもつ。児童数は６７名で各学年単学級の小規模校である。

川原小学校の 4 年生 11 名の子どもたちは、4 月の総合的な学習の時間には、学校の裏の大川原川に探検に行き、生き物を捕まえたり、夏には虫の採集・飼育や花の栽培をしたり、小動物の飼育をしたりして、日頃から自然に親しみ、自然の中でいのちと触れ合っている。このことは、2006 年 12 月調査の連想マップからも読み取ることができる。

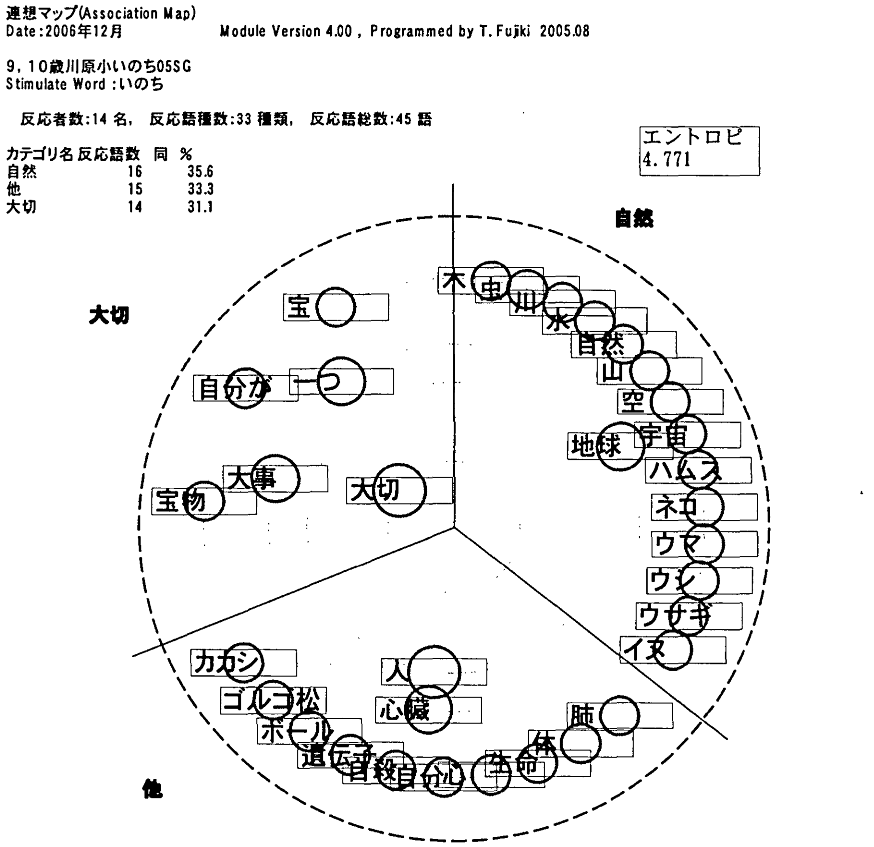


図 2　五島市川原小学校の子どもたちの〈いのち〉連想マップ

<うきは市立妹川小学校の児童の実態>

妹川小校区は、耳納連山に属する山間部にあり、渓谷に沿った谷底平野、河岸段丘、高原状の台地など複雑な　地形に集落が点在している。急傾斜面は、山間地を象徴する石垣によって、水田・果樹園・茶畑などに利用されている。児童数は、昭和３７年には２００名程度、同４７年には１００名を割り、その後も藤波ダム建設に伴う移転などで更に減少し、ここ数年は４０名前後の児童数となっている。また、児童減少に伴い、平成５年４月以来、一部複式学級となっている。

現在、妹川小学校の３．４年生は、３年生が８名、４年生が９名の１７名で構成されている。妹川小学校の子どもたちは、生命が大切であり、一度失うと代わりはないということは知っている。また、育てていた虫が死んだり、萎えていた花に水をやると元気になったりする等、身の回りの動植物のお世話などを通して、人間だけでなく動植物にも生命があることを知り、餌をやったり、水をやったりして生命あるものを大切にしようとする姿も多く見られる。しかし、友達とトラブルを起こすと思わず「死ね」と言ったり、大変なことがあると安易に「死ぬ」と言ったりすることもある。そこで、子どもたちに死についてその判断基準を問うと、死とはいのちをなくすこと、動かなくなること等の答えが返ってきた。また、石ころや時計や木などは死ぬのか問うと、壊れることと死ぬことを同じように考えている子や生きていることと死ぬことを繋げて考えている子などがおり、考えは多様である。

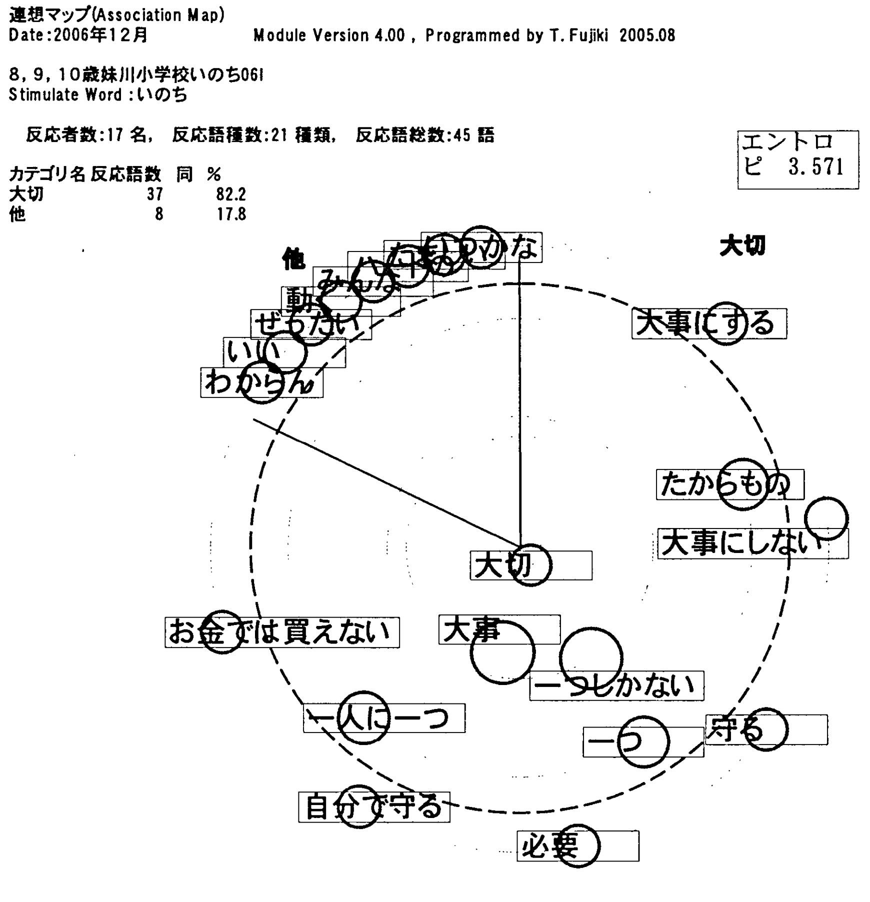


図３　うきは市妹川小学校の子どもたちの〈いのち〉連想マップ

川原小学校の子どもたちと妹川小学校の子どもたちを連想マップをもとに比較してみると、川原小学校の子どもたちは、「いのち」という言葉から「自然」を思い出している。しかしながら、妹川小学校の子どもたちは、「いのちは大切」と答えることに集中している。これは、川原小学校の子どもたちは自然の中の体験からいのちを意識し、妹川小学校の子どもたちはいのちを知識的・観念的に理解しいていると考えられる。

そこで、本授業では、情報機器を活用して、二つの学校をつなぎ、「死」や「生」についてそれぞれの考えを出し合い、話し合いながら自分の考えを自覚することをねらう。自然が多いと見られる両校において、子どもたちの意識に違いが見られることは、二つの学校の子どもたちが互いに話し合う意味があることを示している。自然環境が同様だとしても、生活や教育によって、子どもに形成された死の意識に違いが見られるとすれば、子どもたち同士の話し合いがどのように展開するか、子ども自身の死の意識形成と反省過程として、この授業の意味がある。子どもたち自身が日頃の仲間とは異なる友だちと話すことは、生命尊重に関する道徳的価値の自覚を深めるとともに、豊かな心を育む上からも意義深いと考える。

（2）資料および主題観

＜授業素材＞

本道徳授業は、死の判断について互いの考えを話し合うところから、死の判断根拠についての考えを深め、いのちについての思いを明確にするものである。子どもたちが死について語り合うところから、いのちの認識を確実なものにすることが本授業のねらいである。

死について妹川小学校の子どもたちは以下のような捉え方をしている。

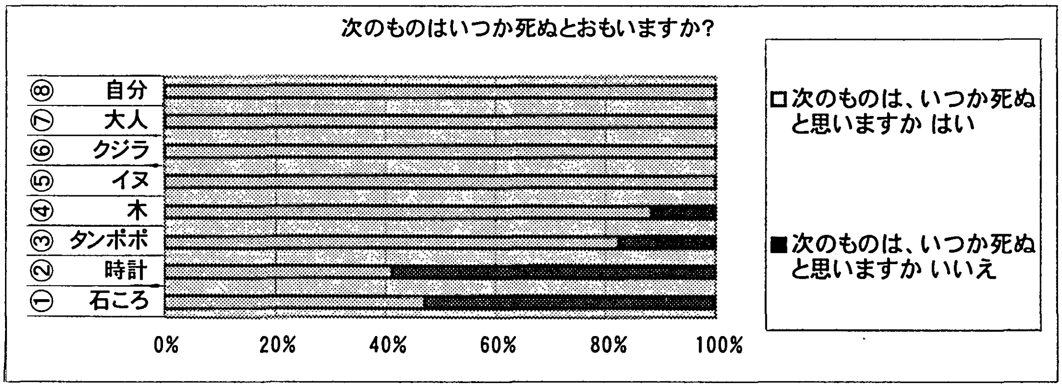
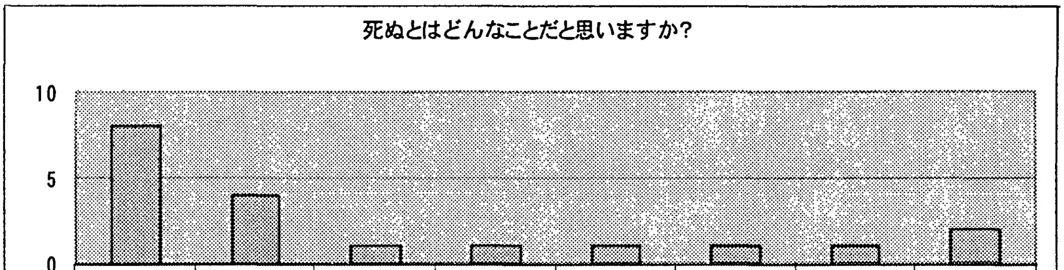


図4　いつか死ぬか、妹川小学校の子どもたち



	いのちをなくすこと	動かなくなること	息をしなくなること	心臓が止まること	人生が終わること	いのちが終わるこ	病気がひどくて助	怖いこと
系列1	8	4	1	1	1	1	1	2

図5　死ぬとはどんなことか、妹川小学校の子どもたち

一方、川原小学校の子どもたちは以下のような捉え方をしている。

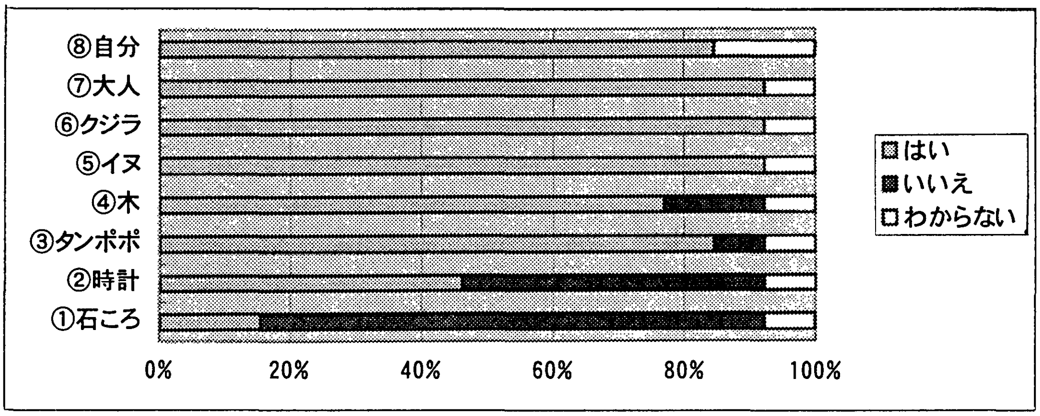


図6　いつか死ぬか、川原小学校の子どもたち

本授業は何が死ぬものであり、何が死なないものであるかを常識の線で答えるようになることではなく、子どもの考えに耳を傾けることであると考える。つまり、子どもたちが自分で、死について、いのちについてどのような判断基準に基づいて考えているかを自覚することを一番のねらいと考える。言い換えれば、自分の判断基準を、他の人の考えとつきあわせることによって自覚することである。いのちについて、今後自分で考えていくことのできる子どもをめざす、その出発点とするために、意見の違いを必要とする遠隔授業を実施するのである。

遠隔授業の流れとしては、以下のような流れを考える。

まずは、テレビ付き携帯電話を活用し、小グループで、死についてそれぞれの子どもたちの考えを交流する。その授業用素材としてタンポポを取り上げる。タンポポを取り上げるのは、事前の死に対する意識調査において、死ぬと思うか思わないかの判断の揺れが比較的大きいからである。タンポポのいのちの在り方についての考えを整理することで、自分のいのちの在り方を示唆することができると考える。

次に、判断について全体で話し合う。グループ毎に話し合いの経過等を発表し、死の判断の根拠を全体で話し合いながら、それぞれが死について生について考えを整理していく。

<主題と学習指導要領>

生命を尊重する心は、人間として自他の生命をかけがえのないものとして大切にする心である。そして、それは、自然や物とのかかわりの中で自分の対象となるものを、いのちあるものとして大切にする心、また、生命あるものをはぐくみ、支えてくれている人間を越えた力への畏敬の心と深くかかわり合っている。

すなわち、生命を尊重する心とは、

(ｱ) 自然に親しみその恩恵を感じる心、動植物を愛する心

(ｲ) 人間のいのちの尊厳を自覚する心

(ｳ) 人間の力を越えたものを畏敬する心

の総合体と言うことができる。こうしたことを前提として、子どもたち一人一人が自分自身の「いのちに対する考え方」を研くために、道徳の時間で次のような事柄を大切にした指導を実施する。

⇩

○道徳の時間に大切にすること

① 生命の誕生に感動すること
・動物の赤ん坊、人間の赤ん坊、自分の誕生、家族の喜びなど

② 生命の神秘にうたれること
・生物の環境に合わせて生きる力「生命のバトン」の仕組みなど

③ 生きることの厳しさにふれること
・生物の世界の食物連鎖、自然淘汰

④ 支え合う生命に感動すること
・親の子を思う愛、人命救助の努力など

⑤ 生きている喜びに感謝すること
・誕生日と自分の成長、家族の愛情など

⑥ 生命の有限性を畏れること
・動植物の死、人間の死、限りあるいのちゆえの尊さなど

道徳の時間における生命尊重の指導の要点として、小学校学習指導要領解説・道徳編をもとに以下のように考える。

【第１・２学年】

○生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。

・例えば、毎日元気に過ごせることへの喜びなど、日常の生活の中で「生きている証」を実感できるようにする。

○ 内容項目３－(2)は、「人間ばかりではなく、生命あるものすべてをかけがえのないものとして尊重し、大切にする子供を育てようとする内容項目である」 ・低学年では、特に動植物にやさしく接し、その成長や変化、死などを通して、人間ばかりでなくすべてのものに生命があることに気づき、生命を大切にする心を育てる指導が大切である。 ※生命を大切にする心を持つ

【第３・４学年】

○生命の尊さを感じ取り、生命のあるものを大切にする。

・現実性をもった死の理解を背景として、誕生や生育の過程、病気やけがをしたときの様子等から、自分の生命と同様に、生命あるすべてのものを大切にしようとする心を育てる。

・中学年では、特に自分自身に目を向け、自分の誕生や成育の過程、病気やけがをしたときの様子などを考えることから、自分の生命の尊さを知り、生命あるものすべてを大切にする心を育てる指導が大切である。 ※生命の尊さを知り、生命あるもの大切にする

【第５・６学年】

○生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。

・誕生から死に至るまでの過程を理解して、誕生の喜びと死の重たさを知ること、自他の生命を尊重し、力強く生き抜こうとする心を育て、生命に対する畏敬のないものとして念を育てる。

・高学年では、特に生命の誕生から死に至るまでの過程を視野に入れて、生きていることの有り難さや不思議さ、死の重さなどを理解しながら、自他の生命を尊重し力強く生き抜こうとする心の育成を図る指導が大切である。 ※生命はかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。

（３）指導観

＜主題説明＞

本主題の指導内容は、いのちあるものをかけがえのないものとして尊重し、自分についても大切であるとの認識をもつ子どもを育てようとするものである。ひとつ一つのいのちが、何ものにも代え難いとともに脈々と続いているという視点から、いのちの価値を見いだす授業を構想した。この二つの視点からのいのちの認識が自らのいのちを大切にし、つながりの中で一人ではない生を確かにすると考える。

小学校中学年においては、この段階になると、現実性を持って死を理解できると言われている。本授業では、川原小学校と妹川小学校の２点を結んでつくる一つのバーチャルな教室において、子どもたちが死についてどのような思いを寄せているのかに耳を傾け、思考を展開する授業をめざしている。

＜授業展開＞

導入段階では、タンポポの種が植えられた鉢を見て、気づいたことを発表することを通して、タンポポの一生を考えさせるための方向づけを行う。展開前段では、タンポポの死に焦点を当て、テレビ付き携帯電話やテレビ会議システムを使って、２校の子どもたちの意見交流を行い、死についての考えを深めるようにする。その後にタンポポの発芽・成長のビデオを視聴させ、死や生についての考えをまとめさせる。そして、展開後段では、自分の死について問いかける。死ぬか否かを考えた後に、判断の根拠を問い、

考えを深める展開とする。判断の根拠は「いのちは一つ」「いのちはつながる」の２つが集約点になるだろう。終末段階では、2006年度から使用する心のノートを提示し、「だから、」という問いに子どもたちに書いて答えてもらい、授業の終末とする。

3　グループ・エンカウンター

＜定義＞

人間の成長は，親と子の関係に根ざしている。学齢期になると仲間との関係が軸になっていき，やがて社会との関係へと対象が拡大していく。関係を築いていくエンカウンターに，今まで気づかなかったか，気づいていても表現できなかった自分を開示していく過程がある。

エンカウンターは，「心とこころのふれあい」であり，グループエンカウンターは，「人工的・契約的なグループの中で本音の自分を発見し，それに従って生きる練習をする場である」と國分（『エンカウンター』國分康隆著 1981年）は述べている。

以下の２点の理由から，道徳遠隔授業で構成的グループエンカウンターを用いることは意義深く，果たす役割も大きい。

まず１つめは，新しい人間関係を作るということである。島嶼部にある川原小・山間部にある妹川小の両校の共通点は，少人数であるため幼少の頃から固定された人間関係の中で生活していることである。したがって，言葉が足りなくても分かり合える兄弟のような人間関係である反面，思考や関係が閉ざされがちである。道徳遠隔授業をおこなうことによって，新しい人間関係，違う視点や予想しない思考に出会うことができる。

２つ目は，授業において意見を交わすということは，人間関係の成立と自己開示を条件としているということである。安心して自己開示し，他を受容するつながりを整えておくことが深い授業への前提となる。

＜目的と意義＞

短時間に人間関係を高められるという利点から，今回は構成的グループエンカウンターを実施する。

エンカウンターをするとは，以下の６つの体験をすることである。

①自分の本音を知る（自己覚知）

②自分の本音を表現する（自己開示）

③自分の本音を主張する（自己主張）

④他者の本音を受け入れる（他者受容＝傾聴訓練）

⑤他者の行動の一貫性を信ずる（信頼感）

⑥他者とのかかわりをもつ（役割遂行）

通常，グループエンカウンターはリーダーとグループが同じ空間、同じ場所に存在し，その中で目的を果たすべくエクサイズを行う。今回の遠隔授業では，川原，妹川の両方のグループが別の場所に存在しながら同時にエクササイズを行い，テレビ電話を活用することにより，友だちの声と顔との出会いを大切にしたい。

そこで，事前のメール交換により，名前と好きなものなどの簡単な自己紹介や自由なやりとりを行い，相手に対する理解を深めておく。そうすることで，友だちの声と顔と

の出会いの感動も大きくなるものと思われる。

本授業でこうした遠隔でのグループエンカウンターを行うのは、以下のような点から意義がある。

・ 遠隔でテレビ電話を使ったグループエンカウンターが成立しうるかどうかの可能性を探ることができる。

・ 道徳授業とグループエンカウンターを結びつける１つの形を提示することができる。

グループエンカウンター計画

グループエンカウンターの＜定義＞ならびに＜目的と意義＞については，２．主題観，(4) グループエンカウンターにおいて述べた。ここでは，事前のメール交流で使うワークシートの『自己紹介カード』，グループエンカウンターの際におこなうエクササイズについて，『紹介ゲーム』と『クイズに挑戦』を紹介する。

（1） 紹介カード

自己紹介カード

○○○○さん

写真

私は□年□月□日生まれの□才だよ。

星座は□座で，血液型は□型だよ。

□人兄弟だよ。

しょう来の夢は□だよ。

好きな動物は□。

好きな音楽は□。

好きな本は□。

好きな食べ物は□。

好きな飲み物は□。

好きなスポーツは□。

好きな色は□。

その他

（2）エクササイズ

○ **紹介ゲーム（オリジナル）**

［ねらい］別々の学校の児童同士，交流を図りながら，「伝え合い」「認め合い」「共に生きる」子どもたちを育てる。ゲーム感覚で楽しくお互いのことをよく知り，心の交流を目的とした活動とする。

○ クイズに挑戦（オリジナル）

［ねらい］グループごとに出題，ヒント，解答発表，計時の役割を協力して行い，別の場所にいながらもグループとしての一体感を味わうこと，また，全体でクイズに挑戦することにより，緊張を解きほぐし仲間に心を開くきっかけにすることを目的とする。

（3） エクササイズ展開案

時間	教師の指示	留意点	川原 増田	妹川 柳瀬
1 分	[インストラクション] ●今日お互いに話すことを楽しみにしていた人も多いでしょう。今日はグループの人同士、たくさんお話ができて仲良くできるようにまず,『紹介ゲーム』をします。	※エクササイズの目的を確認する。	全体	学級
3 分	[エクササイズ1] ●グループの中で電話で話す順番を決めていますね。その順番で交代して話していきます。 ●1番目に話す人は，最初は自分の名前を言ってはいけません。「こんにちは」とお互いにあいさつをした後に，相手がスクリーンのどこにいるか見つけるために「私は前の方にいます。」「手を振ってください。」など指示を出して探してもいいです。相手がスクリーンのどこにいるかわかったらそこで,「こんにちは。○○が好きな○○です。」と紹介をします。	※事前に電話で話す順番を決めておく。	全体 学級	学級
	●どんなふうにするかやってみますね。(デモンストレーション)	※デモンストレーシ	全体 学級	全体 学級

	増田：(携帯電話を手にして)「こんにちは」 柳瀬：「こんにちは」 増田：「どのへんにいますか？ 手を振ってください。」 柳瀬：「後の方にいます。(手を振る)あなたはどのへんにいますか？ 手を振って下さい。」 増田：「私は前の方にいます。」(手を振る) 増田：「ああ，わかりました。」 柳瀬：「私もわかりました。」 増田：「こんにちは。増田です。」	ョンは担任同士で行う。		
	●相手の名前がわかったら，電話で話していない人たちみんなで協力して紹介カードと写真を探してください。そして写真の裏のシールをはがし，紹介カードに写真を貼ってください。貼り終えたら，電話で話す役の人が紹介を始めます。1番目の人が終わったら，順番に交代してください。	※写真はすぐに貼れるように裏面をシール形式にしておく。	全 体 学級	学級
	何か質問はありませんか？ ●ではスタッフの皆さん，携帯電話の準備お願いします。			
6 分	●時間が余ったグループは，クイズに挑戦の話をする順番を確かめたりしてください。それでは，活動を始めて下さい。 －活動中－	※6人グループと8人グループがあるので終了時間のずれに配慮する。		
	●6分経ちました。スタッフの皆さん，携帯電話の回収お願いします。 ●みなさん，お互いの紹介は終わりましたか？		全体 学級	学級
3 分	[エクササイズ2] ●今それぞれのグループの前には，今お話ししたグループの人たちの紹介カードがありますね。もっと仲良くなれるように『クイズに挑戦』というゲームをします。	※エクササイズの目的を再確認する。	全体	学級
	●各グループから順番にクイズ一問とヒントを出してもらいます。時間は1分間で，みなさんに答えてもらいます。わかった人は，手を挙げてくださいね。 ●では，Aグループからお願いします。	＊事前のメール交流で，問題とヒントをグループごとに決めておく。	全体	学級
4 分	－活動中－	※ワイヤレスマイクを発表グループに渡す。	学級 全体 学級 全体	全 体 学級 全体 学級

3 分	●今日の活動をして，どんな気持ちがしましたか。ふりかえり用紙に書きましょう。 ●感想を聞かせてください。	※各学校１名程度	全体 学級	学級

（４）評価

ふりかえり用紙

① けいたい電話を使って，お友だちと話をするのは楽しかったですか？

はい　　　　　　どちらでもない　　　いいえ

② お友だちのことを知ることができましたか？

はい　　　　　　まあまあ　　　　　いいえ

③ 今日のゲームで感じたことや思ったことを自由に書きましょう。

いのちへの思いを育てる道徳遠隔授業展開案

（1）ねらい

互いの考えを知り、話し合うところから死についての考え、いのちについての認識を深める。

（2）展開

段階	学習活動および ○発問・◇指示、説明	指　導　上　の　留　意　点	担当		画面(カメラ)		
			柳瀬	増田	教師	子供	
導入	1　種が植えられた鉢を見て、気づいたことを発表する。 ○「これは何だろう？」 ・鉢。 ・何か植えてある。 ・何もない。 ◇これはタンポポです。川原小には妹川のタンポポの種が、妹川小には川原のタンポポの種が植えてあります。	＊子どもたちはグループで座っている。川原小学校はマットに、妹川小学校はイスに。 ○　タンポポの種を植えた鉢を提示し、テーマへ導入する。 ○柳瀬…鉢を持って発問をする。 ○増田…鉢を持って教師画面へ。 ○　柳瀬が全体進行として、最初は川原小学校の子を2名指名し、バーチャルな教室の一体感を持つように配慮する。後、妹川小学校の子を2名指名する。 ○　川原小には妹川のタンポポの種を、妹川小には川原のタンポポの種を植えた鉢を準備する。	全体進行（鉢を持つ）	学級（鉢を持つ）	川原小画面には柳瀬が映っている 妹川小画面には増田が映っている	基本的にはいつも相手の学校の子どもたちが映っている。	記録用カメラは常時ON
／	2　タンポポの死につい	(※)スタッフ(学生)…話し合い①の発問・指示の後、テレビ付き携帯	全体	学級			

展開前段	て話し合う。 <話し合い①(グループ)> ○「この種から芽が出て、葉が広がって、花が咲いていくけど、タンポポは、いつか死ぬと思いますか？」 ◇タンポポは死ぬのか、死なないのかグループで考えてみましょう。グループ毎に、死ぬと思う人が何人、死なないと思う人が何人いたかまとめ誰かみんなに知らせてください。みんなは「聞き取りカード」に誰がどんな意見なのかメモしてください。時間は3分程度です。 ・タンポポは死ぬ。○人。 ・タンポポは死なない。○人。	電話を子どもに配付する。 ○　テレビ付き携帯電話を使って、グループ毎に話し合ってもらう。その際、グループで各人の考えを紹介してくれる子どもを決めておく。 ○　「聞き取りカード」をグループに1枚準備し、役割を分担しながら、誰がどんな意見なのかを簡単にメモしてもらう。 ○　それぞれの担任は、机間巡視をしながら、携帯電話での意見のやりとりがスムーズになるように、またメモの取り方等を指導する。この段階では誰が死ぬと思っているのか、死なないと思っているのかを聞き、「聞き取りカード」に○をつける。	進行 机間指導	机間指導	相手の教師の顔が映っている。	相手の学校の子	記録用のカメラは常時ON
展開前段	<話し合い①の全体発表> ◇話し合って出た意見等を、各グループ毎に、まとめて誰か一人発表してください。 ・私たちのグループでは、死ぬと思う人が○人、死なないと思う人が○人でした。	○　グループでの話し合い終了後、各グループの話し合いで出た意見について、一人まとめで発表してもらい、全体交流をする。 ○　「死ぬ、死なない」の集計表を作成しておき、全グループの発表が終わったら、グループ別の数値を合計して、提示画面(教師画面)で提示する。 (※)スタッフ(森永)…数値入力 ○　発表順はどちらの学校の子もできるように、A川原、B妹川、C川原、D妹川と決めておく。	全体進行	学級	集計表を提示 ↓	発表グループをアップで撮す ↓	
	〈話し合い②(グループ)〉 ○「いろんな考え方が	○　話し合い①と同様に、グループ毎に話し合い、まとめ役の児童が発表できるようにする。 ○　話し合い①に使った「聞き取り	全体進行	学級	相手の教師の顔が	発表が全部終わっ	

展 開 前 段	あるね。死ぬと思った理由、死なないと思った理由はどんなことだろう？」 ◇話し合い①と同じようにグループ毎に考えてください。今度はどうしてそうなのか理由も考えて一人一人順番に携帯電話で話しましょう。 「聞き取りカード」に友達の意見を簡単にメモしましょう。 一人ずつ理由を聞いてみてください。全員の話が終わったら、友達の話につけ加えたり、質問していいです。時間は10分です。	カード」に、理由を簡単にメモする。 ○　話し合い①と同様に、それぞれの担任は、子どもの間を回りながら、携帯電話での意見のやりとりがスムーズに行くように、またメモをとる支援をする。この段階で、死ぬ・死なない理由を簡単に書いてもらう。	机間指導	机間指導	映っている。 相手の教師の顔が映っている。	たら元の子供画面に戻す。 相手の学校の子	記録用カメラは常時ON
	〈話し合い②の全体発表〉 ◇各グループ毎に、互いに聞いた理由等を代表が発表してください。 ・私たちのグループの死ぬ理由は〇〇でした。反対に死なない理由は〇〇でした。 ◇みんなの理由をまとめると次のようになるようだね。 ・死ぬ…枯れるから。種を飛ばしたら役割が終わってしまうから。 ・死なない…綿毛を飛ばすから。種が飛んでまた花が咲くから。	○　グループでの話し合い終了後、話し合い①と同様に、各グループの代表に話し合いで出た意見について、全体で交流する。 ○　発表順はどちらの学校の子もできるように、話し合い①とは逆にA妹川、B川原、C妹川、D川原と決めておく。 ○　まとめた理由を提示画面(教師画面)に提示する。 (※)スタッフ(森永)…子どもたちの理由をまとめて画面提示。 ○　フロアからのつけ加えや質問などの意見を取り上げる。 ○柳瀬…鉢を持って発問をする。 ○増田…鉢を持って教師画面へ。	全体進行 支援教員(校長)による授業援助	学級	理由のまとめの提示 ↓	発表グループをアップで撮す ↓ 発表が全部終わったら元の	
	〈話し合い③(全体)〉	○　テレビ会議システムを活用し	全体	学級			

	○「では、ここに植えているタンポポの種はどうなると思う？」 ・成長して死ぬ(個体はなくなる)。 ・種（シュ）はつながる。	て、全体で意見交流をさせる。指名は柳瀬がアトランダムに行う。(2,3名を指名)	進行(鉢を持つ)	(鉢を持つ)		子供画面に戻す。	
	<ビデオ視聴> ◇ここにタンポポの発芽や成長の様子のビデオがあるので見てみよう。	(※)スタッフ(学生)…ビデオを流す。 ○　タンポポの発芽や成長の様子のビデオを見る。いのちがなくなること（個体の死）とつながること（種としての存続）の視点に注目させたい。	全体進行	学級	タンポポの発芽成長のビデオを流す ⇩		
／ 展 開 後 段	3　自分の死について話し合う。 <話し合い④(グループ)> ○「自分は、いつか死ぬと思いますか？ どうゆう理由で死ぬと考えたのか、どういう理由で死なないと考えたのかな？」 ◇グループ毎に考えてください。どうしてか理由も順番に携帯電話で話しましょう。みんなは、友達の理由を聞きましょう。	○　代表児童を中心にグループ毎に話し合わせる。 ○　各担任は、子どもたちの様子を見ながら、携帯電話での意見のやりとりがスムーズに行くように支援し、子どもたちの考えを確認する。 (※)スタッフ(学生)…携帯電話を回収する。	展開後段から、双方の教師が共同のTTで授業を進行する形が強くなる。	学級 机間指導	相手の教師の顔が映っている。	相手の学校の子	記録用カメラは常時ON
	〈話し合い④の全体発表〉 ◇では、全体で各グループの意見を聞いてみましょう。まずは川原小学校のお友達から意見を出してもらいましょう。 ◇次は妹川小学校です。 ◇つけ加えや質問などはありませんか。 ・いのちは一つだから自分も死ぬ。	○　川原小学校（増田指名）→妹川小学校（柳瀬指名）の順に２人ずつ意見発表し、その後、全体交流をする。 ○　まとめた意見を画面に提示する。 (※)スタッフ(森永)…子どもたちの発表をまとめて画面提示。	机間指導 支援の教員（校	川原指名	まとめた	発表している子どもをアップで撮る	

	・いのちはつながっていく		長）が入力、画面に流す		意見の提示		
／ 終 末	4 「心のノート」を見て、子どもたちが生活をふまえた考えに広げる ◇心のノートのプリント（提示画面画像）見てみましょう。 ○「だから・・・どんなことを考えますか？」 ◇今日の学習で考えたことを書いてみましょう。	○ 「心のノート」改訂版 p。66 を教師画面に提示すると共にし、プリントとして配布する。P.67 の「だから」以下は空白にしておき書き込めるようにすしておく。それを見て、「一つのいのち」と「つながるいのち」について考えを書く。 ◎ いのちは一つ、だから･･･ ◎ いのちはつながっている、だから･･･	全体進行 机間指導	学級 机間指導	心のノート P66 心のノート P66	相手の学校の子	記録用カメラは常時ON
終 末	◇では、最後に何人かの人に発表してもらいます。	○ テレビ会議システムを活用して、感想を全体に発表してもらう。指名は各担任が行う。川原→妹川の順に行う。 （各校1名ずつ）	妹川指名 全体進行	学級		発表する子どもをアップで撮す。	
	◇今日はみんな一生懸命考えましたね。なるほどなあと思いながら、先生もみんなの考えを聞いていました。終わります。		全体進行		相手の教師の顔が映っている。	相手の学校の子	

聞き取りカード　「タンポポは、いつか死ぬと思いますか？」

名前 （死ぬ）（死なない） 理由	名前 （死ぬ）（死なない） 理由	名前 （死ぬ）（死なない） 理由	名前 （死ぬ）（死なない） 理由
名前 （死ぬ）（死なない） 理由	名前 （死ぬ）（死なない） 理由	名前 （死ぬ）（死なない） 理由	名前 （死ぬ）（死なない） 理由

集計カード

	タンポポは、いつか死ぬと思いますか？	
	死ぬ	死なない
合　計		

（3）評価

○授業の終末に使ったプリント、心のノート p.67 の「だから」以下を空白にして子どもたちに書き込んでもらった内容による評価

○授業前および後におこなう連想調査による評価

刺激語…　いのち　タンポポ　友だち　自分　大切　死

授業前はグループ・エンカウンターの前に実施する

○4 段階の尺度による子どもの評価

（妹川小学校の分を記載、川原小学校の分は学校名が入れ替わる）

つぎのしつ問に，答えてください（○をつけて）

・授業はおもしろかった

とてもそう思う　少しそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない

・友だちの話を聞いた

とてもそう思う　少しそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない

・授業で考えた

とてもそう思う　少しそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない

・自分の考えが言えた

とてもそう思う　少しそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない

・テレビ付きけいたい電話は役に立った

とてもそう思う　少しそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない

・スクリーンにうつった川原小の友だちの顔は，はっきり見えた．

とてもそう思う　少しそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない

・発表している川原小の友だちの声は，はっきり聞こえた．

とてもそう思う　少しそう思う　あまりそう思わない　まったくそう思わない

・すぐ近くに川原小の友だちがいるような感じがした．

　　とてもそう思う　　少しそう思う　　あまりそう思わない　　まったくそう思わない
・スクリーンにうつった川原小の友だちと話し合いができた.
　　とてもそう思う　　少しそう思う　　あまりそう思わない　　まったくそう思わない
・けいたい電話の画面にうつった友だちの顔は，はっきり見えた.
　　とてもそう思う　　少しそう思う　　あまりそう思わない　　まったくそう思わない
・けいたい電話を使って友だちと話し合いができた.
　　とてもそう思う　　少しそう思う　　あまりそう思わない　　まったくそう思わない

謝辞　　この道徳遠隔授業実施にあたっては、五島市教育委員会とうきは市教育委員会の後援を得、またドコモアイ九州長崎支店の中間嘉照氏の支援を受けた。感謝申し上げる。